

## 令和6年度 特別入試（指定校推薦入試） 小論文

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

戸外で子どもを遊ばせることについて、母親が大きな抵抗を示すのは、安全性についてである。それには二つあって、一つは悪い子と遊ぶために、自分の子どもが悪くなるという恐れに関するものだ。自分の子だけはよい子になってくれと願うのは、親として当然のことだろうが、そんなことはいったい可能なのだろうか。ガキ大将の必要性について書いたことがあるので、ここでは繰り返さないが、子どもがガキ大将におべっかをつかい、お世辞を言い、あるいは反抗して泣かされるといった行為を通じて、子どもは自我を確立していくのである。子どもの世界での、子どもなりのつらさ、苦しさを味わってこそ、何が善であり悪であるかを体験として知ることができるのだ。

子どもの世界には、おとなが言う意味での善も悪もない。おとなの目からは悪と見えること、例えばお世辞やおべっかを使うことでさえ、子どもの成長の糧<sup>かて</sup>となっていく素材である。何故なら、子どもはそのとき屈辱と自己嫌悪、あるいは口惜しさにうちのめされるだろう。そのとき始めて、お世辞の何たるかを、体験として学ぶことができるのだ。お母さん方は、善と悪の二分法で、物事を判別しすぎる。そして、すべての悪から子どもを遠ざけようとする。しかしそうして無菌培養された子どもが成長したとき、否応なく遭遇しなければならないおとなの世界の汚濁の中で、悪に対してどう処してよいかわからない、ひ弱な人格をもつことになるのだ。

子どもが心配で放っておけない、ということは、本能的な母性愛の止むに止まれぬ自然の流露であると言う説もあろう。しかし、サルの子育てを見ていると、子どもが死ぬと、ミイラになるまで離さないほど強い愛情を示す母ザルも、子どもが独立していくに従って独立性を認め、しだいに手を引いていく。そういう育て方が、むしろ生物本能に根ざした育て方なのである。いつまでも子どもを監督下におき、母の意のままに従わせようとするのは、母親のエゴイズム以外の何ものでもない。

もう一つの安全性に対する心配は、身体の事故に関するものである。子どもが少しでもけがをすると、やれ医者だとたいそうな騒ぎになり、二度とけがをしないような方策が厳重にとられる。しかし、小さなけがは放っておいても勝手に治るものだし、よしんば大けがをしたといっても、わんぱく遊びの中では、せいぜい手足を折る程度ではないか。子どもときの骨折は、つながるとかえって強くなるというふうに、子どもの復元力は、中古品になったおとなのからだとは根本的に違うものなのだ。

### 【設問】

筆者が伝えたいことを200字程度に要約した上で、あなたの考えを要約を含めて800字程度で述べなさい。